

ける T_3/rT_3 比 (2~8, 平均 5±2) とは差異を認めない。またこの変化は ^{131}I と MMI の併用例、PTU 投与例でも同様であり、必ずしも従来報告されているような rT_3 の相対的高値は認めなかつた。

抗甲状腺剤投与中、甲状腺機能低下状態になった例では、MMI 投与例で T_3 に比し rT_3 , FTI の低下がより明瞭であり、 T_3/rT_3 比は高値を示したが (7~15), MMI 減量により機能正常化した例では T_3/rT_3 比約 4 と減少した。PTU 例では MMI と逆に T_3/rT_3 比約 3 と rT_3 相対的高値を示した。

^{131}I 投与後、propranolol のみでコントロールした 1 例では、 rT_3 は持続的に相対的高値を示し、 T_3/rT_3 比は 2~2.5 と低値を持続した。

10. rT_3 RIA キットの基礎的、臨床的検討

小泉 潔 伊藤 広
立野 育郎
(国立金沢病院・放)

Reverse T_3 (rT_3) 測定キットをダイナボット研究所を通じて入手したので、基礎的、臨床的検討を加え報告する。

キットは、B-F 分離に PEG を用いた RIA で必要血清量は 0.1 ml である。

インキュベーション時間および温度は結合率に影響を及ぼし、時間の長い方、温度の高い方が結合率は高い。

キット内再現性は平均変動係数 9.5% であり、キット間再現性は平均変動係数は 15.4% であった。回収率は平均 120% であった。

希釈試験では蒸留水希釈、 rT_3 free 血清希釈とも希釈につれ測定値の低下を認めたが、後者の方がその低下は少なかった。

交叉試験では T_3 との交叉性には問題はなかつたが、 T_4 とは少し交叉性を示した。しかし、これは rT_3 のコンタミの可能性もあった。

臨床例において、健常者の26名の平均土標準偏

差は $264 \pm 70 \text{ pg/ml}$ であり、機能亢進例で高値、低下例で低値を示していた。投薬により機能正常状態となっている症例では、プロパジール投与例はメルカゾール投与例に比し高い値を示していた。健常者、各種甲状腺疾患治療例、未治療例計 109 例において、 rT_3 は T_3 , T_4 , Tr, T_7 と有意な相関を示していた。

rT_3 RIA キットは基礎的検討で充分満足する結果を得た。臨床的検討でも従来の報告と一致する結果を得た。しかし、臨床的有用性に関して今後の検討が待たれる。

11. SPAC T_4 -RIA, T_3 -UPTAKE についての基礎的、臨床的検討

加藤 敏光 鈴木 雅雄
浅田 修市 今村 孟義
土井 健誉
(岐大・放)
仙田 広平
(浜松医大・放)

SPAC T_4 -RIA, T_3 -uptake について、それぞれ incubation temperature, incubation time, 再現性, triosorb, Res-O-Mat T_4 との相関、諸種状態における値の分離をみた。

T_3 -uptake index については、温度変化による影響が大きいのに対し、incubation time については、hyperthyroid で index の変化が大きく、諸種状態における分離には 60 分の incubation がよかつた。

T_4 -RIA 値については、温度変化による影響が少ないのに対し、incubation 時間にについては hyperthyroid において時間による影響が大きいので、時間を一定にして incubation する必要がある。

T_3 -uptake, T_4 -RIA はそれぞれ、triosorb, Res-O-Mat T_4 とよく相関し、再現性はよいが、hypo, と euthyroid との分離は従来の測定法と同程度であった。